

# 世界をみつめて1

## 相対的な「正しさ」の時代へ

岡本 俊裕

日本語に“正義”という「正しさ」を表現する言葉がある。またこれに類する語は、英語の justice のように、他の言語にも有るはずだ。私たちは日頃、なんとなく“正義”や「正しい」という言葉までの距離を測りながら、毎日をあたふたと生きている。しかし一旦、個人を越えて国家や民族という集団になると、人々は自分の「正しさ」を振りかざして、世界の各地でいがみ合いや憎しみ合いを始める。自分の「正しさ」を誰もが声高に叫び、世界は様々な「正しさ」であふれかえる。

「正しさ」には1つではなく、色んな種類があるのだろうか。これは何処にでも簡単に転がっているものなのだろうか。いや、それ以前に「正しさ」とは一体何なんだろうか。

紙幅に制限があるが、「正」という漢字から「正しさ」を考えよう。

10年位前のある日、私は海岸の道を歩いていた。道と海の間には鉄道が走っている。天気がよくて、何も考えずに歩いて行くと、点滅する赤い光と警報音とが急に頭の中に飛び込んできた。電車だ。目の前で踏切の遮断機が下がる。轟音と風圧。体を強張らせてじっとしていたが、すぐに音はやみ、ランプの赤い点滅も停まった。遮断機がカラカラと音を立てて上がる。進もうと足元に視線を落とす。すると、さっきのとは別の色が目を打った。花束だ。きちんと束ねられた赤い花と少しの葉の緑が、警報機の根元に置かれている。そう、ここには少し以前の“死”…。次の瞬間、私には「正しい」の意味が分かった。それは“この線を越えるな”というメッセージだった。

「正」という漢字を見てほしい。眼前に置かれた線である「一」の前で「止」まるという形になっている。なんと明け透けな形なのだろうか。私が踏み切りで聴いたのは、字の形の通りに“線の前で止まれ、越えれば死だ”という脅しの言

葉だった。線を越えてはならない。線の前では歩みを止めないと「正しくない」。そして「正しくない」と、轟音と赤い光の点滅の中で身を切り裂かれる…。この漢字は「正しさ」の本質を、そのままに私たちの前に持ってくる。

単純なことだ。線路のように人間が引いた線、その前では止まるべきであり、越えたと何らかの不利益が下される。他の種類の線、例えば国境。国境とは人間が勝手に定めた線で、物理的には越えることができるはずだが、これは一度引かれると、自由な通行を制限する。なぜならば、自由に国境線を越えることは、線を保つ国家にとっては「正しくなく」、制限されるべきことだからだ。

このように「正しさ」は、線を引くと、何時でも何処にでも勝手に作り出せる。すると引いた線の数だけ「正しさ」が世界に存在することになる。こうなると1つではなく、個人や集団ごとに固有な「正しさ」が出現する。色んな線で分割された世界は、色んな種類の「正しさ」でがんじがらめになる。

だが“正義”という言葉が使い古された今だからこそ、我々はもう一度「正しさ」の意味を考え、この言葉の危うさと、これに固執することの滑稽さを認識し、「正しさ」の適切な利用を考えるべきだろう。

恐らく、「正しさ」の最も有意義な利用方法は、これに従来のような“線越え禁止”の絶対的な“正義”を求めるのではなく、相対的で可変的な、互いのbenefitが接触する境界線としての「正しさ」を認めることにあるのではないか。簡単に言えば、自分にとって「正しい」ことは相手にとって必ずしも「正しい」とは限らず、人間の数だけ「正しさ」の存在が許され、「正しい」という言葉は、単純に自己の利益が最大になるような状態を指すのにすぎない、と認識することだ。

過去の8年間に「正しい」・“正義”という言葉は、多くの人間を殺した。だが私は肌で変化を感じる。今は、唯一で絶対的な「正しさ」ではなく、多様で相対的な多くの「正しさ」を認める時代に滑り込みつつある、と。

おかもと としひろ（教授・中国語学）